

甲藤先生を偲んで

The Merory of Prof. Katto

原村 嘉彦 (神奈川大学)

Yoshihiko HARAMURA (Kanagawa University)

甲藤先生の不肖の弟子の私がこんなところで、何か書くのは、気が引けてしまいます。何といても、大学院を修了して以来、ゆっくりとお話したのは数えるほどしかありません。編集委員の高田先生の強い勧めに従って、内輪話を少し書かせていただきます。

甲藤先生との最初の出会いは、教養部の頃に専門の先生が交代で駒場に来て話をする科目においてです。この年は甲藤先生が代表の先生で、教養部特有の大きな階段教室で、講義の趣旨やスケジュールの話をしてくださいました。講義の内容は忘れてしまいましたが、「甲藤」の読み方の話をしたことはかすかに覚えています。次に接したのは3年次の「伝熱工学」の授業でした。整然とした板書が印象的で、その講義ノートとともに、ほぼ毎回配られる青焼きで印刷された演習問題や補足説明のための図のプリントが、今も手元に残っています(図1)。講義で習った式が友人のノートのもものと違っていたため友人2人と先生の部屋まで行って質問したことがあります。先生の机の前には安物のソファが置いてあり、そこに座るように言われ、緊張して説明を聞きました。

そこで先生とゆっくり話したのは、大学院を修了するまでに10回もなかったような気がします。その1つはM2の時。実験装置の設計でR-113を200気圧近くまでポンプで昇圧したのを冷却するために、熱交換器を50万円ほどで購入したいと提案しに行ったときです。これは専門なんだから自分で設計して作りなさいと、きつく叱られました。D3の時に沸騰を模擬する空気吹き出し面を使った実験結果の説明の際も、等エンタルピ流れなんだから、そんな考えではだめだ。アメリカにでも行ってもう一度勉強し直した方がいいんじゃないかと叱られました。

ただD1の冬休み明けに、甲藤・原村のモデルとなった限界熱流束のモデルの説明をしたときは、

ひどく優しくなったように思えます。説明の要領が悪かったせいで、最初はなかなか考えを理解してもらえませんでした。確認する質問をしながらずっと話を聞いてくださいました。1週間かもう少したったとき、先生に呼ばれて部屋に行ったら、先生が横谷さんとの研究で整理していた気泡の挙動と私の考え方を組み合わせた、甲藤・原村のモデルの草稿を渡されました。私はM2の時以来、液膜流沸騰における限界熱流束を取り扱っていたこともあって、あのような非定常過程ではなく、定常状態での液供給を想定した考えを持っていましたので、全く違う展開に戸惑いました。甲藤先生にしても、流体力学的不安定をあのような形で適用することにややためらいがあったようで、流体力学の先生に相談しなさいともおっしゃいました。論文がInternational Journal of Heat and Mass Transferに掲載され、Cumio先生からモデルを高く評価する内容の手紙を受け取ったときには、喜んでおられたのを記憶しています。

先生の人となりをお伝えできる2つのエピソードを紹介して、本稿を終わりにしたいと思います。確かD1の夏、毎年やっている夏の旅行で外房総の海岸に行ったときです。3台ほどの車に分乗して出かけましたが、私の乗った車は、私の趣味で、山道を通って宿まで行きました。先生の乗った車は、多分その車の運転手の趣味で、海岸に沿って進み宿に着きました。夕飯の際にどこを通って来たかの話になったとき、先生が、「仁者は山を選び、知者は海を選ぶ」といった趣旨の言葉を口にされました。

もう一つ、私が1989年に在外研究の機会を得てヒューストンに行っていたときのこと。暑中見舞いの返事に、International Journal of Heat and Mass Transferをみてご覧なさいといったことが書かれていました。何か重要な論文が出ているのかと思って図書館で見たところ、実は、この雑誌恒例の

追悼

65歳を記念した先生の紹介文でした。それを見たとき、先生もお茶目なところがあるんだなと思ったものです。

最後にお会いしたのが、4年ほど前の夏、お宅

に伺ったときです。足が少しご不自由ではありましたが、まだその頃は普通の生活をされていました。研究についての突っ込んだ話をしなかったのが悔やまれます。ご冥福をお祈りします。

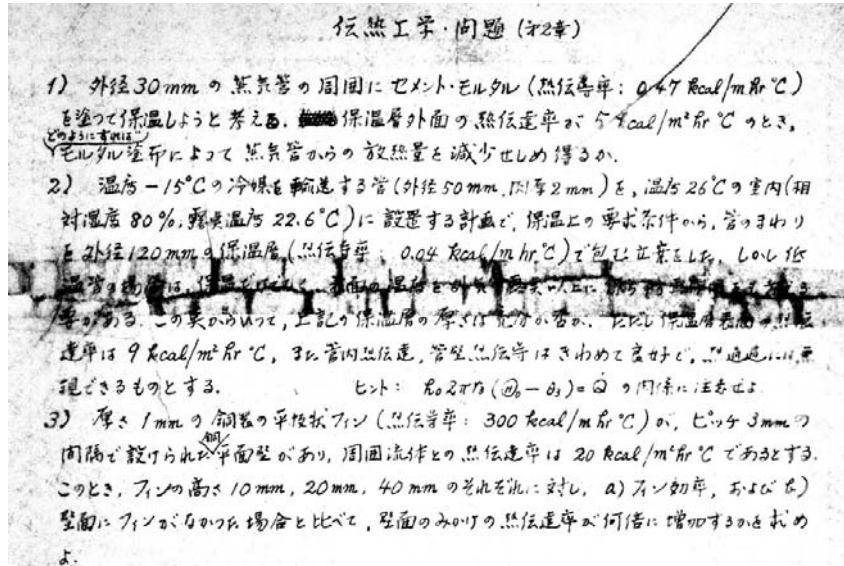


図1 「伝熱工学第一」で配布された甲藤先生直筆の青焼きの演習問題(中央付近にはセロテープで補修した跡が見える)